

『アジア辺境論』

2017年09月18日

政治学者の姜尚中氏と哲学者の内田樹氏の対談集『アジア辺境論 これが日本の生きる道』が上梓されている。二人は共通して「アジア主義」を語っている。「アジア主義」は大上段な論ではなく、「辺境」という言葉を使っている。アジアの辺境とは、半島の韓国、島国の日本、台湾である。アジアの辺境にある、この三国が連携すれば、大きな経済圏ができ、安全保障においても変化が起こるという論である。韓国とは歴史認識で、台湾とは中国との関係で、容易に連携できるとは思えないが、辺境から歴史を変えていくという考えに共感を持った。覇権を握った大国は内部から腐敗し、衰退していったことは、歴史の示す通りである。周辺、辺境から歴史を正す正義とエネルギーが噴出してくるのではないか。私は、日本の辺境に位置する沖縄から、主権を持つ、自立した日本が再生するのではないかと期待している。

この対談の中で、内田氏は興味深いことを語っている。現行憲法は言論の自由や出版、集会、結社の自由を保障している。自民党が出した改正草案は、これらの自由を謳っているが、「公益及び公の秩序に反しない限り」という制約をつけている。この制約は「国家意思に反しない限り」と読める。国家が国民を治める形になる危険性が透けて見える。ところが、居住、移転の自由と職業選択の自由についてはいかなる制約も課していない。当たり前なことであるが、内田氏は、制約を課していない理由は日本を捨てる権利を確保しておきたかったからであると言う。現に、富裕層たちは資産を租税回避地に移し、日本を見限っている。機動性のある人間に自由が享受できることになっている。

ここから、民主主義と自由主義がなぜ無力になったのかという議論に進む。グローバル化によって自由という概念が機動性という概念に改鑄されてしまった。機動性の高い、グローバルに活躍できる人間だけが高く格付けされ、機動性の低い人間は劣位に位置づけられるルールが導入された。機動性の高さは社会的能力ではあるが、一元化した階層が形成され、分配に不公平が起こっている。

機動性はないが、地域社会において中心的な役割をしていて、「あなたがいなくなったら困る」というような話が聞けなくなる。この貧しさは、自由が機動性にとって代わられたからである。機動性の高い人間は自由な人間ではなく、経済のグローバル化に最適化した人間に過ぎない。本当の自由とは、心、思想、良心の自由である。強権的に押し付けるイデオロギーに対し、「違う」と思えることで、それを言語化して周りの人たちに同意を求める作業ができることである。自由は与えられるものではなく、自らが培っていくものである。ヒトラーは民主制の下での選挙によって政権を得たが、独裁制に変質した。民主制は独裁制を内包している。同じように、自由主義の中に自由を蝕むものが内包されている。民主と自由は基本的な単語であるが、人によって違う意味で使われている。まず、言葉の問題をきちんと整理しておく必要がある。

ここからは、私の感想である。日本の政治において、衆参議会がねじれていた時、決められる機動性のある政治が求められると言っていた。独裁者が必要だという暴言さえあった。現在の安倍政権は一強で、国会審議を形骸化し、即座に強行採決している。民主主義は自由を保障した発言が諸々出され、時間をかけて議論を深める中で形成されていく。別な言葉で言えば、多様性を受容し合う状況こそが健全で、新しい文化を生み出す。一元化し、排外的になっている現状に大きな不安を抱いている。